

『十三世紀フランス語聖書』 (*Bible française du XIII^e siècle*) 彩飾写本研究：最初期の作例について

駒田 亜紀子

1. はじめに¹

『十三世紀フランス語聖書 *Bible française du XIII^e siècle*』は、13世紀中葉にパリで成立した、初の完訳版フランス語聖書である²。今日、断片を含め、13世紀後半から15世紀後半にかけて制作された30点余の写本作品が伝存するが、その多くは何らかの挿絵彩飾を伴う作例である³。本論では、『十三世紀フランス語聖書』の最初期の作例2点 (Paris, BnF., fr. 899および Evora, Biblioteca Publica e Arquivo Distrital, cod. CXXIV/1-1) を取り上げ、挿絵彩飾の様式的出自と制作年代を明らかにすることにより、成立初期の『十三世紀フランス語聖書』をめぐる諸問題を解明する端緒としたい。

2. パリ、フランス国立図書館、フランス語899番写本 (Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 899; 以下 Fr. 899と略す)⁴ (図1)

372フォリオ、270 x 200mm

収録テキスト：創世記、出エジプト記、民数記-詩篇、4福音書、使徒行伝、使徒書簡 (ヤコブ、1ペトロ、2ペトロ)、黙示録

制作地：パリ

制作年代：1270-75年頃

『十三世紀フランス語聖書』写本に関する本格的な研究は、聖書文献学の泰斗サミュエル・ベルジェが1884年に公刊した、中世の散文体フランス語聖書研究の第3部を、その嚆矢とする。ベルジェは、当時彼が存在を知り得た写本テキストを手掛かりに、ラテン語ウルガータ訳聖書の散文体フランス語による初の全訳テキストを、『十三世紀フランス語聖書 *Bible française du XIII^e siècle*』と命名した。Fr.899は、この著書の中で、ベルジェが同テキストの最も信頼しうる写本として筆頭に掲げた作例である⁵。ベルジェは、Fr.899本文の言語学的特徴から、同写本は現存する『十三世紀フランス語聖書』写本の中で最古の作例であり、1250年前後のパリの制作と考えた⁶。しかしながら、1884年当時『十三世紀フランス語聖書』を完全な状態で収録した写本の存在は確認されておらず⁷、Fr. 899も旧約

聖書後半部や新約聖書の書簡の大半を欠く状態で伝存していたため、初の完訳フランス語聖書としての『十三世紀フランス語聖書』の存在自体を疑問視する研究者もいた⁸。『十三世紀フランス語聖書』の写本テキストとしての“実体”が認められるようになったのは、20世紀に至り、13世紀末から14世紀初頭に遡る何点かの完本の存在⁹が知られるようになってからのことである。

Fr.899は、サミュエル・ベルジェの研究以来、中世フランス語散文体聖書テキスト研究者の間では少なからず知られた存在であった。しかし、聖書を構成する各書冒頭の挿絵が詩篇中の4点の物語イニシアル（図1）¹⁰を残しすべて切り取られていることが災いしてか、美術史研究において言及されることは稀であった¹¹。

Fr. 899について美術史研究の分野から初めての本格的な様式的分析を行ったのは、遺著となった1977年刊行の労作においてルイ9世治下のパリ写本彩飾の体系的研究に道を拓いた、ロバート・ブランナーである¹²。ブランナーは、Fr. 899の挿絵画家を、バーリ（南イタリア）のサン・ニコラ聖堂に伝存する典礼書 *Capella* の彩飾画家¹³に因み「バーリ・アトリエ」と命名するグループに、分類した¹⁴。グループの名祖となったバーリ写本は典礼暦等の与件によればフランス王室のいずれかの構成員のために1250年代後半から1260年頃にパリで制作されたと推定されることから、ブランナーはこの *Capella* を核とするグループの主要写本を1250-60年代のパリの制作としている¹⁵。ブランナーの指摘する通り、ラテン語による典礼書や1巻本ないしは複数巻構成の註解付きラテン語聖書から『梨物語 *Roman de la Poire*』（Paris, BnF, fr. 2186）や仏語訳ユスティニアヌス法典等の世俗写本に及ぶバーリ・グループの帰属作品は多岐にわたり、そこには複数の異なる画家の手を識別しうる。ブランナーはこれらの派生様式を分析し、バーリ・グループ帰属作品に見られる大きな曲線を描くやや硬質の衣襷様式から、同じくブランナーの命名になる「ショレ・グループ」¹⁶に代表される次世代のより流麗な絵画的様式への移行を1270年前後とし、これを前者の活動時期の下限とすることを示唆した¹⁷。

ブランナーは、Fr.899に関しては、グループ後期の派生様式の一つと位置づけ、様式的に近い作例として、後半部に次世代のショレ・グループに帰される挿絵を含むル・マン市立図書館所蔵の4巻本ラテン語聖書（Le Mans, Médiathèque Louis Aragon, ms. 262）等を挙げている¹⁸。その一方で、本論では直接に指摘してはいないものの、フランス国立図書館所蔵のパリ使用式ミサ典書（Paris, BnF., Lat. 830）の物語イニシアル（図2）の図版（fig. 295）をFr.899（図1）のそれ（fig. 296）の傍らに掲げ、両者を様式的に関連付けようとしていたようにも見える¹⁹。事実、ミサ典書フォリオ125の物語イニシアルは、様々な点において、バーリ・グループ帰属写本の中でもFr. 899のそれに最も近い様式的特徴を示している。すなわち、長身の人物を単純なシルエットで囲むための黒い輪郭線、マントや衣の地色の同系暗色で塗られた衣襷を描き起こすラフな線、マントの輪郭線の内側に添えられた白い細線など、衣襷表現上の特徴や、耳から後頭部へと平行する曲線で描かれた大振りな巻き毛、大きく見開いた眼、眉からほぼ垂直に伸びる長い鼻や下降気味の口角な

ど、人物の相貌上の特徴、物語イニシアルの文字本体と枠の間の青ないし赤に塗られたスペースを装飾する繊細な白色の細線による蔓草文様、人物の背地に見立てられたイニシアル内部の格子状文様、さらにはイニシアルの文字本体の先端を延長した蔓草やそこからさらに余白に伸びる鋸歯状のモチーフを伴う蔓（アンテナ）の形状などの特徴である。特に、イニシアル内部に描かれた人物像は同じ画家の手になる可能性が高いと思われる。

Fr. 899を13世紀第3四半期パリの制作と見ることに差し当たり異論は無いものの、より正確な制作年代については、慎重な議論が求められよう。『十三世紀フランス語聖書』の中でも現存最古の写本とされるFr. 899の制作年代は、同テキストの研究、中でも初期作品の写本伝承関係（*stemma*）の解明にも関わる問題である²⁰。また、バーリ・グループとショレ・グループという13世紀第3四半期の様式的転換を検証する上でも貴重な作例となるル・マンの4巻本聖書に関しては、基本的にはプランナーの方法論を受け継ぐアリソン・ストーンズが本文書体の比較に基づき1280-90年代という遅い年代を示唆している²¹ことも、念頭に置くべきであろう。また、バーリ・グループの中核写本の一つでもある『梨物語』については、本文テキストの編纂と改変時期に関する近年の研究成果に基づき、現在では1270-80年頃の制作と考えられている²²。

段落形式の挿絵や物語イニシアルの大半を失ったFr. 899にあって制作年代を推定するための手がかりとして筆者が注目するのは、部分的にせよ切断を免れた二次的装飾である。トビト記冒頭（fol.197）の挿絵枠の右下角に残る自然主義的な描写のやや大振りな緑色の蔦葉は、1280-85年頃の制作とされる『ケレスティヌス修道会の聖書』（Paris, Bibliothèque de l'Arsenal, ms. 590）の創世記冒頭の余白装飾（図3）²³など1270年代以降のパリ写本彩飾により頻繁に登場するモチーフであり、Fr.899の比較的遅い制作年代を傍証する要素と考えられる。また、福音書や使徒書簡の冒頭に残る大型の装飾イニシアル（fol. 271, 331, 370, 372v）は、文字本体とイニシアル外枠との間のスペースを充填する蔓草の末端のドラゴン等のグロテスク・モチーフや、蔓草のアラベスク間のスペースを研磨した金箔地とローズないしはブルーの地で塗り込める装飾意匠を特徴とするが、これは、イニシアル本体から余白に伸びる鉅歯状モチーフを伴うアンテナの形状とともに、1260-70年頃の制作と推定されるサント・シャペルの『典礼用福音書抄本』（Paris, BnF, Lat. 17326）²⁴中のイニシアル（図4）にも見出される要素である。限られた情報に基づく比較ではあるが、以上の考察より、Fr. 899の制作年代として、バーリ・グループの活動時期の末期に相当し自然主義的な描写の緑色の蔦葉が登場し始める、1270-75年頃を提案したい²⁵。

3. エヴォラ、市立図書館、CXXIV/1-1番写本（Evora, Biblioteca Publica e Arquivo Distrital, cod. CXXIV/1-1；以下Evora CXXIV/1-1と略す）²⁶（図5）

300フォリオ、340 x 250 mm

収録テキスト：創世記-民数記、ヨシュア記、士師記、列王記3-4、歴代誌上、ネヘミヤ記、トビト記、ユディト記、ヨブ記、詩篇
制作年代：1260-70年頃
制作地：パリ

Evora CXXIV/1-1は、Fr. 899と並び、現存する『十三世紀フランス語聖書』写本の最初期の作例の一つである。収録テキストには何ヶ所かの欠落があるものの創世記から詩篇までをカバーしており、2巻本構成の写本の前半部のみが伝存したものと考えられる²⁷。この写本は、1871年に刊行された所蔵図書館写本カタログ第4巻において、「BIBLIA franceza」の見出しの下、テキスト同定に十分な長さの創世記冒頭部の引用と共に記述されているが²⁸、サミュエル・ベルジェの1884年の著書やこれを補足するポール・メイエル²⁹の1888年の書評において取り上げられることは無かった。中世フランス語聖書研究においてEvora CXXIV/1-1が言及されるようになったのは、1978年C.R. スネッドンがオクスフォード大学に提出した博士論文²⁹以後のことである。しかしながら、制作年代を15世紀とした1871年のカタログの誤った記述がそのまま引用され続けたためもあってか、この写本の（潜在的）重要性に注目した論考はいまだ発表されていないようである³⁰。Evora CXXIV/1-1の制作年代に関する19世紀以来の誤った見解が訂正され、詩篇冒頭の挿絵入りページがカラー図版により公刊されたのは、2001年刊のポルトガル所蔵中世彩飾写本総目録の第2巻においてである³¹。

Evora CXXIV/1-1の挿絵装飾（図5）について、2001年刊の総目録は、挿絵や装飾イニシアルの種類を簡潔に記述するに留まり、彩飾の様式や制作地・制作年代に関する具体的な分析は行っていない。ロバート・ブランナーの1977年刊の遺著にも言及はないが、同著者の様式分析に基づく分類に従えば、我々の写本は、ボストン市立図書館が所蔵するアントワヌ・デュ・プラ枢機卿（1463-1535）旧蔵の大型4巻本ラテン語聖書の挿絵画家に因み「デュ・プラ・アトリエ」と命名されたグループ³²に帰属するものと考えられる。

デュ・プラ・グループの帰属作品の特徴は、まず人物表現に求められる（図5-8）。ゆったりとした衣服をまとった人物たちは肉付きの良いどっしりとした体型を持ち、地色と同系の濃色により畝と溝を際立たせた衣襷は、多くの場合、「単純に途中で消え入るというよりも、起点と終点が明瞭な同心円状あるいは曲がりくねったパターンを成す」³³。卵形ないしは球体状の頭部は身体に比して大きい。頭髪については、頭頂部から側頭部にかけては顔の輪郭に沿うように額を卵形に囲み、耳の上で小さくカールした後、項に向かって垂れ下がる鬘（みずら）のような髪形（図6）や、浅い船底形の輪郭を描く額の生え際から後頭部に向かって撫で付けられた髪が大きくカーブしながら側頭部に掛かり耳から後頭部をぐるりと囲むようにカールする髪形（図5, 7）が、特徴的である。人物の相貌については、Evora CXXIV/1-1の詩篇冒頭のダヴィデ像（図5）に見られるように、山形の弧を描く上まぶたと直線に近い下まぶたを細線で描き、左右の両端が開いた眼の輪郭

の中に瞳を小さな黒い点で表した白目がちの表情が、このグループを判別する手がかりともなろう。挿絵や物語イニシアルの背地として、ブルーないしはローズを地色とする格子状文様を好むバーリ・グループとは異なり、デュ・プラ・グループは研磨した金箔地をしばしば用いている（図5, 7, 8）³⁴。塗られた面積自体は少ないが、金地に映えるエメラルド・グリーンをアクセントのように挿絵や装飾イニシアルに用いるのも、このグループの特徴の一つと言ってよかろう。Evora CXXIV/1-1の詩篇冒頭の挿絵では、豪華な玉座に座し豎琴を奏でるダヴィデの王冠や王を荘厳するアーチの側柱に塗られたエメラルド・グリーンが金地に映え、アーチのスパンドレル部分には、他のグループ帰属作品にもしばしば見られる、3個組の小さな白点を散らしたサーモンピンク地が用いられている（図5）。

ブランナーによりデュ・プラ・グループに分類された作品は15点を数える。その大半は小型の1巻本あるいは比較的大型の複数巻構成の註解付きラテン語聖書（計10点）であるが、典礼用福音書・書簡集や世俗信者のための私的な祈祷書（図6, 8）、仏語訳ユスティニアヌス法典註解（図7）なども含む³⁵。さらに、様式的に関連する作品として、ティルス司教ウィレムスによる『エルサレム王国年代記 *Historia rerum in partibus transmarinis gestarum*』の仏語訳（*Histoire d'Outremer*）写本³⁶等を挙げている。

上述のバーリ・グループに比べて様式的な均一性の高いデュ・プラ・グループではあるが、その活動期間については1220年代末から1250年代頃までの比較的長いスパンをブランナーは示唆している。グループ帰属作品の制作年代を推測する上で実質上の基準作の一つとしてブランナーが挙げるのは、フィレンツェのリッカルディアーナ図書館所蔵の詩篇集（Firenze, Biblioteca Riccardiana, cod. 309）（図6）である。ブランナーは、詩篇集冒頭の典礼暦に1228年列聖されたアッシジの聖フランチェスコの祝日の記載が無いことを根拠にその制作年代を1228-30年以前と推定し、同写本をグループの最初期の作例とする。このリッカルディアーナ詩篇集においてすでにグループの特徴的な様式が確立されていることを認めつつ、グループ中期から後期にかけての作例では、初期の緩やかな同心円状曲線を描く溝状の衣襷（図6）から座像の両膝の間などに三角形のループを描く衣襷（図5, 7）へ、あるいはよりフラットな衣襷への移行が認められるとする³⁷。

ブランナーの考えるデュ・プラ・グループの様式展開については、現時点で参照可能な資料を検討する限りほぼ妥当と思われるが、帰属作品の制作年代については、より慎重な議論が求められよう。特に、典礼暦上の与件に基づくとは言え、リッカルディアーナ詩篇集（図6）を1220年代末の制作とする主張には疑問の余地が残る。本論で詳細に検討する余裕は無いが、ブランナーがリッカルディアーナ詩篇集に1228-30年頃という（私見では早過ぎる）制作年代を主張したのは、その挿絵を特徴づける溝状の衣襷や眼を大きく見開いた人物の相貌に、一連の『ビートル・モラリゼ』の制作に携わった画家群³⁸との間の様式的影響関係を想定したためではなかろうか。確かに、溝の部分に深い陰影を施し衣襷の立体感を強調する衣襷表現に関しては、リッカルディアーナ詩篇と一部の『ビートル・モ

ラリゼ』の挿絵間には類似点が認められると言えなくもない。他方、そうした複雑な衣襷を裾や輪郭の部分で単純なシルエットに還元する手法³⁹は、『ビーブル・モラリゼ』より後の世代の画家に特徴的な細部であると筆者は考える。また、ブランナーは、彼がグループ中期に位置付けるアッシジ所蔵の複数巻構成のラテン語聖書（Assisi, Biblioteca del Sacro Convento, cod.1 *et al.*）⁴⁰の一部をなしていた可能性のある同じくアッシジ所蔵の詩篇（Assisi, Biblioteca del Sacro Convento, cod. 7）の挿絵を（1235年頃の完成とする）トレド（Toledo, Biblioteca del Cabildo）および（1235-45年頃の制作とする）オクスフォード（Oxford, Bodleian Library, ms. Bodley 270b）所蔵の2点の『ビーブル・モラリゼ』の画家グループに関連付けているが⁴¹、13世紀パリで制作された複数巻構成のラテン語聖書に関する詳細な論考を発表したラウス夫妻は、アッシジ聖書が1250年代にパリで制作された別の複数巻構成のラテン語聖書と同時代の作例と考えられることを指摘し、アッシジ詩篇の様式的帰属に関するブランナーの主張は承服できないと述べる⁴²。

1973年に亡くなったブランナーの遺著と前後して公刊された、J. フォルダによる13世紀後半の十字軍関連彩飾写本に関する研究では、ブランナーがデュ・プラ・グループ後期様式に関連する作品として挙げる2点の仏語版『エルサレム王国年代記』写本（Pari, BnF., fr. 2603, fr. 24208）の様式については具体的な議論は殆どなされておらず、制作年代についても13世紀第3四半期と述べるに留まる⁴³。これに対し、同著の中で両写本と様式的に近い作例として引用されているベルン所蔵の仏語版『エルサレム王国年代記』写本を取り上げた1993年の論文では、様式的に見て上記2作品より年代がやや下るとされるこの関連作品に1270年頃という比較的遅い制作年代を与えている⁴⁴。

他方、デュ・プラ・グループ帰属作品に関する近年の論考として、ラウス夫妻の考察と並び注目されるのは、ハイメ・オルティス＝パティーニョ旧蔵の詩篇・時祷書（図8）に関する作品解説である。挿絵の中で2度にわたり跪き祈祷する姿で描かれた貴婦人のために制作されたと推定されるこの祈祷書は、13世紀パリの作例としては異例の、福音書やキリスト受難伝、聖人伝を主題とする挿絵サイクルを詩篇部分に伴う、入念な仕上げの作品である⁴⁵。残念ながら典礼暦の詳細は不明であるが、輪郭と裾の部分で単純なシルエットに還元された細い溝状の衣襷様式に照らし、カタログ解説が提案するように、1250-60年頃の制作と見るのが差し当たりは妥当と思われる。付言すれば、Evora CXXIV/1-1においてダヴィデを荘厳する役割を果たす画面枠内部に架けられた緩やかな三葉形アーチは、祈祷書においても描かれる場面の室内外を問わず頻出するモチーフである。

ブランナー以後に発表されたデュ・プラ・グループに関わる論考は、いずれも問題となる作品を1250年代以降すなわち「後期」に位置付けるものであるが、それぞれの作品のより正確な制作年代についてはさらなる検討が必要となろう。我々の Evora CXXIV/1-1に関して言えば、詩篇冒頭挿絵に描かれたダヴィデ座像（図5）の衣襷は、右脚大腿部から外側に落ちるローズのマントが作る三角形のループ状の襷や、背中や下肢の輪郭に平行して走る溝状の襷を単純な直線的シルエットに還元する裾の扱いなど、ブランナーがグルー

ブ後期に位置付ける仏語訳ユスティニアヌス法典註解 (Paris, BnF., fr. 22969) (図7) や複数巻構成のラテン語聖書 (Paris, BnF., lat. 11545) の挿絵⁴⁶ に共通する特徴を示す。付言すれば、ハイメ・オルティス＝パティーニョ旧蔵の祈祷書 (図8) ではこうした衣襷の殆どが濃褐色の描き起こし線により表現されているのに対し、Evora CXXIV/1-1 (図5) では衣の地色と同系の濃色を用いて明暗を強調した立体的表現となっている。また、祈祷書 (図8) 挿絵中の人物はグループ最初期の作例とされるリッカルディアーナ詩篇集 (図6) 挿絵中のやや面長で卵形の顔の人物を想起させるのに対し、より球形に近いがっちりした頭部を持つフランス語聖書中のダヴィデ (図5) は、仏語訳ユスティニアヌス法典註解 (図7) やラテン語聖書の男性像に極めて近い。

様式的な均一性が比較的高いデュ・プラ・グループ帰属作品にあって、以上の限られた範囲の比較考察から Evora CXXIV/1-1 (図5) の制作年代を推定することは容易ではない。グループの最初期ならびに後期作品の制作年代についても更なる検討が必要であるが、いずれにせよ、グループ全体の活動時期としては、ブランナーが提案するよりもやや下る年代を考えるべきであろう。ハイメ・オルティス＝パティーニョ旧蔵の祈祷書 (図8) と仏語訳ユスティニアヌス法典註解 (図7) および複数巻構成のラテン語聖書との比較に限って言えば、後者2写本は祈祷書より時代の下る様式的特徴を示し、かつ Evora CXXIV/1-1により近いと言えるだろう。上述のように祈祷書の制作年代を1250-60年頃とする提案を受容れるならば、Evora CXXIV/1-1はこれよりやや下る1260-70年頃の制作とすることが現時点では妥当と思われる⁴⁷。

4. 結語

Evora CXXIV/1-1 (図5) の制作年代を1260-70年頃とする我々の提案は、同写本を (1270-75年頃の制作と我々の考える) Fr. 899 (図1) とほぼ同時代あるいは先行する時期に位置付けることを意味する。比較的大振りでフラットな衣襷と痩身で細面の人物を特徴とするバーリ・グループの Fr. 899と、彫りの深い筒状の衣襷に包まれた丸みを帯びた体躯とがっちりした球形の頭部を持つ人物を特徴とするデュ・プラ・グループの Evora CXXIV/1-1とを、直接に比較して制作年代を議論することは容易ではない⁴⁸。むしろここで強調すべきことは、いずれの様式グループも、ラテン語による典礼書や1巻本あるいは複数巻構成のラテン語聖書から世俗写本に及ぶ多彩なレパートリーを展開し、13世紀第3四半期のパリにおける写本彩飾の「平均的」あるいは典型的な様式傾向を代表しているということである。『十三世紀フランス語聖書』の第一世代とも呼ぶべき Evora CXXIV/1-1と Fr. 899が、13世紀のパリを舞台に新たに形成されつつあった *milieu*⁴⁹ において注文・制作されているという事実は、『十三世紀フランス語聖書』成立当初の所有者や受容環境を探る上で、重要な手掛りとなろう。13世紀を通じ進行しつつあった、世俗の

写本工房における聖書図像の展開と受容層の量的・質的な拡大、換言すれば聖書図像の需要（受容）・供給体制の変革は、これ以降、中世後期全般を通じて、世俗写本挿絵における聖書図像の展開の素地となってゆく。

先行研究においてその（潜在的な）重要性が不当にも看過されてきた Evora CXXIV/1-1について Fr. 899に先立つ制作年代を提案することは、Fr. 899を『十三世紀フランス語聖書』の現存最古の写本とするこれまでの中世フランス語聖書研究に根本的な再考を促すものである。テキスト研究の進展、なかでも14世紀前半までの初期作品の写本伝承関係（*stemma*）の究明により、我々の課題でもある『十三世紀フランス語聖書』の初期の受容環境や伝播プロセスの解明に資する新たな知見がもたらされることを期待したい⁵⁰。

主要参考文献：

- BERGER (S.) : *La Bible française au Moyen Age. Etude sur les plus anciennes versions de la Bible écrites en prose de langue d'oïl*. Paris, 1884.
- BOGAERT (P.-M.), éd. : *Les Bibles en français. Histoire illustrée du moyen âge à nos jours*. Brepols, 1991.
- BRANNER (R.) : *Manuscript Painting in Paris during the Reign of Saint Louis*, Los Angeles, 1977.
- BURGIO (E.) : I volgarizzamenti oitanici della Bibbia nel XIII secolo (un bilancio sullo stato delle ricerche), in : *Critica del Testo*, VII/1 (2004), pp. 1-40.
- FOLDA (J.) : *Crusader manuscript illumination at Saint-Jean d'Acre 1275 - 1291*, Princeton, 1976.
- MEYER (Paul) : compte rendu de BERGER (S.), *La Bible française au Moyen Age*, in : *Romania*, XVII (1888), pp. 121-141.
- QUEREUIL (M.) : *La Bible du XIIIe siècle. Edition critique de la Genèse*. Genève, 1988.
- ROUSE (R.H. & M.A.) : *Manuscripts and their makers. Commercial Book Producers in Medieval Paris 1200 - 1500*. 2 vols. London, 2000.
- ROBSON (C.A.) : Vernacular Scriptures in France, in : LAMPE (G.W.H.), éd., : *Cambridge History of the Bible*, Cambridge, 1969, pp. 436-452.
- SNEDDON (C.R.) : *A Critical Edition of the Four Gospels in the Thirteenth-Century Old French Translation of the Bible*. Ph.D., 2 vols. University of Oxford, 1978.
- SNEDDON (C.R.) : The "Bible du XIIIe siècle": its Medieval public in the light of its manuscript tradition, in : LOURDAUX (W.), VERHELST (D.), ed. : *The Bible and Medieval culture*, Leuven, 1979, p. 127 - 141.
- STONES (A.) : Les manuscrits du cardinal Jean Cholet et l'enluminure beauvaisienne vers la fin du XIIIe siècle, in : *L'art gothique dans l'Oise et ses environs (XIIIe - XIVe siècle). Architecture civile et religieuse, peinture murale, sculpture et arts précieux, etc ... Colloque international organisé à Beauvais les 10 et 11 octobre 1998 par le G.E.M.O.B.*, 2001, p. 239-266.
- Exposition Paris 1998 : GABORIT-CHOPIN (D.), sous la direction de, : *L'Art au temps des rois maudits. Philippe le Bel et ses fils 1285-1328* (catalogue d'exposition, Paris, Musée national du Grand Palais), Paris, 1998.

Exposition Paris 2001 : DURAND (J.) & LAFFITTE (M.-P.), sous la direction de, : *Le trésor de la Sainte-Chapelle* (catalogue d'exposition, Paris, Musée du Louvre), Paris, 2001.

註

1 本論は、筆者が2002年度に鹿島美術財団より研究助成を受けた研究について2003-2004年に発表した2件の研究報告（「13世紀フランスを中心とする聖書図像の伝播・交流に関する研究-『十三世紀フランス語聖書』写本挿絵の展開-」鹿島美術財団編『鹿島美術研究年報』第20号別冊、平成15（2003）年、p. 471-480、および2004年5月鹿島美術財団にて口頭で行った研究報告）においてその概要を示した、『十三世紀フランス語聖書』彩飾写本研究の一部をなすものである。『十三世紀フランス語聖書』の現存最古の写本作品の制作年代を明らかにするという本論の目的に鑑み、同テキストの彩飾写本全般に関する先行研究ならびに同テキストに関する聖書文献学ないしは中世フランス語文学における先行研究については、稿を改めて問題点を整理することとしたい。

2 『十三世紀フランス語聖書』写本テキストに関する主要な研究としては、以下の文献を参照。BERGER (S.): *La Bible française au Moyen Age. Etude sur les plus anciennes versions de la Bible écrites en prose de langue d'oïl*, Paris, 1884, chap. 3 ; ROBSON (C.A.): Vernacular Scriptures in France, in : LAMPE (G.W.H.), éd.: *Cambridge History of the Bible*, vol. 2., Cambridge, 1969, pp. 436-452, esp., p. 445sq. ; SNEDDON (C.R.): *A Critical Edition of the Four Gospels in the Thirteenth-Century Old French Translation of the Bible*. Ph. D., 2 vols., University of Oxford, 1978 ; Ibid.: The "Bible du XIIIe siècle": its Medieval public in the light of its manuscript tradition, in : LOURDAUX (W.), éd.: *The Bible and the Medieval Culture*, Louvain, 1979, pp. 127-141 ; Ibid.: A neglected medieval Bible translation, in : *Romance Languages Annual*, 5 (1993), pp. 111-116 ; Ibid.: Pour l'édition critique de la Bible française du XIIIe siècle, in : *La Bibbia in italiano tra Medioevo e Rinascimento. Atti di Convegno internazionale* (Firenze, Certosa del Galluzzo, 8-9 nov. 1996), Firenze, 1998, pp. 229-254 ; Ibid.: The Origins of the "Old French Bible": the Significance of Paris, BnF., fr. 899, in : *Studi francesi*, CVII (1999), pp. 1-13 ; Ibid.: On the creation of the Old French Bible, in : *Nottingham Medieval Studies*, XLVI (2002), pp. 25-44 ; QUEREUIL (M.): *La Bible du XIIIe siècle. Edition critique de la Genèse*, Genève, 1988 ; BOGAERT (P.-M.): *Les Bibles en français. Histoire illustrée du moyen âge à nos jours*, Brepols, 1991, pp. 29-30 ; BURGIO (E.): I volgarizzamenti oitanici della Bibbia nel XIII secolo (un bilancio sullo stato delle ricerche), in : *Critica del testo : Storia, geografia, tradizioni manoscritte* (a cura di Gioia PARADISI & Arianna PUNZI), Roma, vol. VII/1 (2004), pp. 1-40.

3 主要な『十三世紀フランス語聖書』挿絵入り写本については、拙著2003（註1を参照）中のリストを参照（修正の必要あり）。

4 Cf. *Catalogue des manuscrits français. Ancien Fonds*. Tome 1, Paris, 1868, p. 152 ; BERGER 1884, pp. 111sq., 204sq., 340 ; SNEDDON 1978, esp. vol. 1, pp. 148-151 et passim ; BOGAERT 1991, p. 29-30.

5 BERGER 1884, p. 111 sq.

6 BERGER 1884, pp. 111-112. ベルジェは、1240年代末の制作と推定されるパリのサン・ジャック修道院由来のラテン語聖書（Paris, BnF, lat. 16719-16722）との彩飾の類似を、制作地・年代を比定する根拠としている。

- 7 当時ベルジェが確認していた『十三世紀フランス語聖書』の他の作例は、断片も含め以下の11点の写本である：Paris, BnF, fr. 6-7；Paris, Arsenal 5056；London, BL, Harley 616；Cambridge, Univ. Lib., Ee 3. 25；Paris, Mazarine 35 (olim 684)；Paris, BnF, fr. 398；Vatican, BAV, Reg. Lat. 26；Paris, BnF., fr. 6258；Bruxelles, KBR 10516；Rouen, BM 185 (olim A211)；Paris, BnF, fr. 12581. Cf. BERGER 1884, pp. 112-119.
- 8 MEYER (P.) : compte rendu de BERGER 1884, in : *Romania*, XVII (1888), pp. 121-144.
- 9 ベルジェ以後その存在が知られるようになった『十三世紀フランス語聖書』の主要な完本の作例は以下の2写本である。Chantilly, Musée Condé, mss. 4-5；New York, Pierpont Morgan Library, M. 494.
- 10 Fol. 233, 242, 249, 253v.
- 11 管見では、VITZTHUM (G.) : *Die Pariser Miniaturmalerei von dem Zeit des Hl. Ludwig bis zu Philipp von Valois*, Leipzig, 1907, p. 47に簡単な言及がある。
- 12 BRANNER (R.) : *Manuscript Painting in Paris during the reign of Saint Louis*, Los Angeles, 1977.
- 13 BRANNER (R.) : Two Parisian Capella Books in Bari, in : *GESTA*, VIII/2 (1969), pp. 14-19.
- 14 BRANNER 1977, pp. 102 - 107, esp., p.103. 106. バリー写本に関する近年の研究としては、Exposition Paris 2001 : *Le trésor de la Sainte-Chapelle* (catalogue d'exposition sous la direction de DURAND (J.) & LAFFITTE (M.-P.), Paris, Musée du Louvre), Paris, 2001, cat. no. 40, pp. 170-171を参照。バリー・グループ帰属写本に関する近年の論考としては、STONES (A.) : *Les manuscrits du cardinal Jean Cholet et l'enluminure beauvaisienne vers la fin du XIIIe siècle*, in : *L'art gothique dans l'Oise et ses environs* (XIIIe - XIVe siècle). (Actes du colloque international organisé à Beauvais les 10 et 11 octobre 1998), Beauvais, 2001, pp. 239-266, esp., pp. 261-263を参照。
- 15 BRANNER 1977, p. 229-230. ブランナーはここで19点の写本作品をグループ本体に、6点を関連作品として分類している。
- 16 枢機卿ジャン・シヨレ Jean Cholet の注文になる2点の写本の彩飾画家に因む命名。Cf. BRANNER 1977, p. 130-132. 同グループに関する近年の研究としては、Exposition Paris 1998 : *L'Art au temps des rois maudits. Philippe le Bel et ses fils 1285-1328* (catalogue d'exposition sous la direction de GABORIT-CHOPIN (D.), Paris, Musée national du Grand Palais), Paris, 1998, nos. 170, 171 (notices par François AVRIL) ; HIGGITT (John) : *The Murthly Hours. Devotion, Literacy and Luxury in Paris, England and the Gaelic West*. London, 2000, esp., chap. 4 ; STONES 2001, esp., pp. 257-263を参照。
- 17 BRANNER 1977, p. 106.
- 18 BRANNER 1977, p. 106. ル・マンの4巻本ラテン語聖書については、BRANNER 1977, pp. 106, 131-136, 229, 238, figs. 297, 298, 385, 387 ; STONES 2001, esp., pp. 261-263を参照。アリソン・ストーンズは、ル・マンの聖書前半部のバリー・グループに帰属される彩飾の制作年代については直接言及していないが、冒頭の創世記ページを筆写した写字生の特徴的な筆跡を1282-97年に同地で筆写されたカルトジオ修道会殉教録写本 (Le Man, Médiathèque Louis Aragon, ms. 75) に認め、聖書の本文筆写もこれと同時代と推定している。
- 19 Lat. 830については、BRANNER 1977, p. 85, 104-105, 229, fig. 295, pl. XX を参照。
- 20 『十三世紀フランス語聖書』の写本伝承関係に関する研究としては、SNEDDON 1978, vol. 1, p. chap. 2 ; QUEREUIL 1998, pp. 37-52を参照。
- 21 上記註18を参照。

- 22 Cf. BENNETT (A.) : A Thirteenth-Century French Book of Hours for Marie, in : *The Journal of the Walters Art Gallery*, LIV (1996), pp. 21-50, esp., pp. 23-24, note 33 (p. 35).
- 23 『ケレスティヌス修道会の聖書』については、Exposition Paris 1998, no. 181を参照。
- 24 いわゆる「第3の」典礼用福音書抄本を指す。同写本については、BRANNER 1977, pp. 118, 122-136, 239, 239 ; figs. 365, 366, 369, 377, 378 ; Exposition Paris 1998, no. 169 (notice par Fr. AVRIL) ; Exposition Paris 2001, no. 37を参照。
- 25 本文の下位文節(章)冒頭や各ページ上辺余白のランニング・タイトルに用いられた赤ないし青インクによるフィリグランを伴う装飾イニシアルについても同時代作品との比較考察を行うべきであるが、この問題については別の機会に改めて論じたい。
- 26 Cf. RIVARA (Cunha), éd. : *Catalogo dos manuscritos da biblioteca publica eborense*, Lisboa : Imprensa Nacional, 1871, pp. 13-14 ; CEPEDA (Isabel Vilares) & FERREIRA (Teresa A.S. Duarte), éd. : *Inventario dos Codices iluminados até 1500. Vol.2 : Distritos de Aveiro, Beja, Braga, Bragança, Coimbra, Evora, Leiria, Potalegre, Porto, Setubal, Viana do Castelo et Viseu. Apêndice - Distrito de Lisboa*, Lisboa, 2001, no. 155, pp. 94-95.
- 27 後半部の存在は確認されていない。写本末尾の見返しに、1566年の年記を持つフランス語の銘文がある。Cf. CEPEDA & FERREIRA 2001, p. 94.
- 28 RIVARA 1871, p. 13-14.
- 29 SNEDDON 1978, vol. 1, p. 23, 153-154.
- 30 QUEREUIL 1988, p. 37 ; BURGIO 2004, p. 33. いずれも旧約聖書前半部分を含む写本リスト内での言及に留まる。また、スネッドン教授自身、研究の焦点が福音書を含む新約聖書部分にあるためか、筆者の知る限り、1978年の博士論文以後の論考では Evora CXXIX/1-1に全く言及していない。
- 31 CEPEDA & FERREIRA 2001, pp. 94-95. ただし、制作年代については、13世紀と述べるに留まる。
- 32 BRANNER 1977, pp. 78-80, 218-219.
- 33 BRANNER 1977, p. 79.
- 34 例えば、BRANNER 1977, figs. 189, 191, 194, 195, 199.
- 35 BRANNER 1977, p. 218-219.
- 36 Paris, BnF., Fr. 2630 ; Fr. 24208.
- 37 BRANNER 1977, p. 80.
- 38 一連の『ビートル・モラリゼ』写本に関しては、ブランナー以後、多様な視点からの考察が発表されているが、これらの挿絵の様式分析と制作年代に関わる主要な論考としては、次の文献を参照。BRANNER 1977, chap. 2 ; DE FLORIANI (Anna) : *Miniature parigine del Duecento. Il Salterio di Albenga e altri manoscritti*, Genova, 1990 ; LOWDEN (J.) : *The Making of the Bibles Moralisee*. 2 vols., University Park, 2000, esp., vol. 1, chaps. 2-5.
- 39 例えば、リッカルディアーナ詩篇集の「聖母戴冠」の挿絵において画面右端で香炉を振る天使の衣およびマントの表現と、BRANNER 1977, figs. 47-49 (『ビートル・モラリゼ』トレド写本) 中の天使およびキリストのそれとを比較。
- 40 BRANNER 1977, p. 80, 218, fig. 199.
- 41 BRANNER 1977, p. 56, 62-64, 207-209 ; fig. 112, 113. 『ビートル・モラリゼ』の制作年代について

は、上記註38に挙げる文献を参照。

42 ROUSE (R.H. & M.A.) : *Manuscripts and their makers. Commercial Book Producers in Medieval Paris 1200 - 1500*. 2 vols., London, 2000, vol. 1, pp. 68-71, esp., note 116 (p. 346).

43 Fr. 2630 については FOLDA (J.) : *Crusader manuscript illumination at Saint-Jean d'Acre, 1275 - 1291*. Princeton, 1976, p. 33 note 36, p. 85 note 48, p. 157 ; figs. 175-177 : Fr. 24208については FOLDA 1976, p. 33 note 36, p. 85 note 48, p. 125 note 32, p. 157 ; Figs. 172-174をそれぞれ参照。

44 FOLDA (J.) : Images of Queen Melisende in Manuscripts of William of Tyre's *History of Outremer* : 1250-1300, in : *GESTA*, XXXII/2 (1993), pp. 97-112, esp., fig. 16, p. 112, no. 7 (Bern, Bürgerbibliothek, ms. 112).

45 本作については、The Jaime Ortiz-Patiño Collection of Important Books and Manuscripts, Part II, London, 2 December 1998, lot. 1, in : *Western Manuscripts and Miniatures* (London, Sotheby's, Tuesday 1 December 1998), London, 1998, pp. 102-108を参照。

46 Cf. BRANNER 1997, p. 80, 218-219, figs. 191, 193.

47 エヴォラの聖書に含まれる赤ないし青インクによるフィリグランを伴う装飾イニシアルについても同時代作品との比較考察を行うべきであるが、この問題については別の機会に改めて論じたい。

48 両写本の本文の書体やフィリグランを伴う装飾イニシアル等の二次的装飾要素の比較考察については、稿を改めて検討したい。

49 この問題に関する近年の徹底した論考としては、本論でも言及した2000年刊行のラウス夫妻による労作を参照されたい。

50 本論は、日本学術振興会による科学研究費補助金（基盤研究C）の対象である研究課題の一部をなすものである。ここに明記して謝意を表したい。

図1 パリ フランス国立図書館
フランス語899番写本 『十三世紀フランス語聖書』
フォリオ253v

図2 パリ フランス国立図書館 ラテン語830番写本
『パリ使用式ミサ典書』 フォリオ125

図3 パリ アルスナル図書館 590番写本 『ケレスティヌス修道会のラテン語聖書』
フォリオ4v (ページ下辺余白)

図5 エヴォラ 市立図書館 CXXIV/1-1番写本
『十三世紀フランス語聖書』 フォリオ273v

図4 パリ フランス国立図書館 ラテン語17326番写本
『サント・シャベルの第3の典礼用福音書抄本』 フォリオ116

図6 フィレンツェ リッカルディアーナ図書館 390番写本 『詩篇集』 フォリオ161

図7 バリ フランス国立図書館 フランス語22969番写本
『仏語訳ユスティニアヌス法典註解』 フォリオ17

図8 個人蔵(ハイメ・オルティス＝パティーニョ旧蔵) 『時祷書・詩篇集』 フォリオ211